

藤尾と美禰子の罪

Junko Higasa 2014.6.2

『三四郎』の美禰子の言葉『われは我が^{とが}愆を知る。我が罪は常に我が前にあり』は、そのまま『虞美人草』の藤尾にも当てはまる。

一体彼女たちの「罪」とは何であろうかと考えた時に、思い浮かぶのは「結婚問題」である。二人は共に父親が他界して、兄が家長となる。この時代、娘の結婚には家長の承諾が必要であった。したがってこの二人に共通する罪は、父から家長を引き継いだ兄に結婚を決められる前に、自分で選んだ相手と結婚しようとしたことである。

藤尾は、家長が決めた宗近一を差し置いて、小野清三と結婚しようとした。美禰子は野々宮宗八と小川三四郎を惑わして、自分で選ぶ結婚への道を開こうとした。その二人の先にあるのは博士夫人という地位である。二人は英語を習い、自分を磨き、金よりも地位を求めた。それはどういうことかという、家督よりも個人の自由を重視したということである。

まず兄が決める結婚は、家同士の財産保持・拡大が第一目的であるから、女は家督存続・繁栄の道具も同然だ。それはイプセン『人形の家』の嫁いだばかりのノーラのような。しかしノーラは自分の自由に目覚めた。それが藤尾と美禰子なのである。女も男と変わりなく一人の人間として認めてもらいたい。二人は“人形の家”から独立するために、従属物としての贅沢よりも、個人としての自由を目指した。